
悪ノ娘ト召使

ファリナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪ノ娘ト召使

【Nコード】

N88250

【作者名】

ファリナ

【あらすじ】

君は王女、僕は召使。

運命分かつ哀れな双子。

君を守るその為ならば、僕は悪にだってなってる。

双子のはずなのに、いつの間にか引き裂かれ、君は王女として育ち、僕は君の召使として育ち。

どうしてこども運命が違うのだろう？

例え世界の全てが君の敵になろうとも。
僕が君を守るから、君はそこで笑っていてね。

(前書き)

とにかく鏡音三大悲劇の小説を作ってみたかったW
で、最初に来上がったのが悪ノでした。

ゴーン……

どこかからか鐘の音がする……。あの日も確か鳴っていた気がする。

あの時は始まりを告げていた鐘。でも今は違う。

僕は君を守れたのだろうか……？例え僕が消えてしまっても、君は笑っていてくれるだろうか……？

ゴーン……

あ、最後の鐘が鳴った。もうお別れの時間だ……。

いや、`お別れ`の時間じゃない……。君ならこう言うはず

「あら、おやつ時間だわ」

それが僕の、最後の言葉だった……

- 悪ノ娘ト召使 -

ゴーン…ゴーン…

鐘が鳴る中、僕は生まれた。

ここは黄の国。この国では王を決めなくてはならなかった。

生まれてから数年しか経っていなかった僕は、そんなことなど気にせずに遊んでいた。

僕は双子。僕の名前はレン。もう一人はリンで、僕の姉だ。

「レンー！こっちにきてー！」

「うん、いまいく！」

花畑の中、僕はリンの元へと駆けていこうとした。けれど……

「いや！はなしてー！」

彼女の悲鳴が聞こえた。急いでリンの元へ行くと、彼女を王にする、ということ誰かが言っていた。

「リンをはなせっ!!」
僕はリンを連れていこうとする大人たちに向かって叫んだ。
けれど、子供の僕らは逆らうことができず、そのまま僕らの運命は
分かれていった…。

あれから10年が経った。

私はこの黄の国の頂点に君臨していた。
今日は新しい召使がやってくる。どんな人だろう…、と期待してい
ると、

「召使がお見えになりました、王女様」

「そう。どうぞ、入って」

私がその声をかけると、「失礼します」と言う声と共に見覚えのあ
る、私と同じ年くらいの少年が入ってきた。

彼は……まさか……っ!?

「レン……な、の……?」

「お久しぶりです、お嬢様」

そう言って頭を下げる彼はやはり、私の弟のレンだった。

「会いたかった……会いたかったよ、レン!」

気がつく私の頬には涙が伝っていた。

「僕も、会いたかったよ……リン」

私たち双子は10年経った今、再会を果たした。

ある日僕たちは隣の「緑の国」へ行くことになった。

「レン、早くー!」

「待つてくださいよ、お嬢様っ!」

リンは初めて来る場所に目を輝かせていた。そして僕は、そんな彼
女を追いかけていた。

まるで、10年前のあの日みたいに…。

突然、リンが立ち止まった。その視線の先には、青の国の王子様と
この国の街娘が歩いていていた。

ふと、緑の街娘と目が合った。

緑で綺麗な髪と瞳。そして、優しげな笑顔。

「こんにちは」

不意に街娘が声をかけてきて、僕は慌てて笑顔を作った。

「こ……こんにちは……」

僕は上手く笑顔を作ることができたのだろうか……？

「どう……し、て……！？」

隣でリンの声が聞こえた。

城に戻るとリンは大臣を呼び出し、ある頼み事をしているのが聞こえた。

その内容は……

「緑の国を滅ぼして！早く……！」

「王女様、そんなことをしては、黄の国が……っ」

「そんなこと、どうでもいい！あの人を手に入れられればそれでいいのよ……！」

「し……しかし……」

「お嬢様」

僕は君のためなら悪にだってなつてやる。

「僕が行ってきます」

「レン……っ」

緑の街娘を消す。たったそれだけのことなのに、僕にとってはこの上なく辛いことだった。

夜になり、僕は人気のない場所へ彼女を呼び出していた。

「こんな時間に呼び出したりしてすみません……」

「いいえ、別に構いませんよ」

彼女はやはり微笑んでいた。これから、死ぬというのに

「私はミクと言います。あなたは……？」

「僕は……」

殺す相手に名前を教えるなんて……。

「レン、と言います」

そう言うのと同時に僕はナイフを取り出し、彼女に向けた。

「私を、消す……殺すんですね……？」

「はい……」

こんなこと、僕は望んでいなかった。けれど、あの子の望みは全部叶えたいから……。

「ごめんなさい……」

「あなたが謝る必要はないわ」

「……え？」

僕は彼女の顔を見る。その顔は幸せそうな笑顔だった。

「私は……あなたのおかげでこんなにも幸せになれたのだから……」

言いながら彼女は僕の手を自分のほうへと引っ張っていた。

「なに……を……っ？」

「私に短い恋を教えてくれて、ありがとう。あなたのためになるのであれば、これでいいんです」

僕からナイフを取ると彼女は自分に向け、そして

「本当にありがとう。そして……さようなら」

鮮血が飛び散った。彼女は　　ミクは死んだ。

これで良かったはずなのに、僕は涙が止まらなかった。

扉を叩く音が聞こえた。レンが帰ってきたんだ！

「おかえりなさい、レン」

私は笑顔で言うと、彼も笑ってくれた。けれどその顔はどこことなく悲しそうな顔だった。

「レン、どうしたの？」

「え……っ？」

「泣い、てるの……？」

「あ……… 本当だ………」

レンは泣いていた。それはきつと私の

「レン、今日はもう休んでてもいいのよ？」

「いえ、お嬢様の側にいるのが、僕の役目ですから」

「レン……」

その日レンは私の隣で静かに泣いていた。

もうすぐこの国は終わる。そう悟ったのは青の国が攻めて来たからだ。

「ど、どうしよう、レン」

リンは戸惑っていた。

気がつけば城の外は人でいっぱいだった。その中にリンが好きだった青の王子と、リンを捕えに来た赤の女剣士がいた。

逃げ出す家臣たち。攻め込んで来る兵士たち。

僕はリンに服を渡した。

「……レン？」

「これを着て早く逃げてください」

「……！？レンは！？レンも一緒じゃなきゃ嫌っ！！！」

リンが僕の服を掴んだ。

「お嬢様……」

僕はその手をそっと握って、離れた。そして昔の様にリンに言った。

「…大丈夫、僕らは双子なんだよ？」

「でもっ！？」

「きつとバレないよ」

僕はリンに微笑んだ。

と、外から足音が聞こえた。

「さあ、早く隠れて！！」

「嫌っ！」

嫌がるリンを無理矢理タンスの中へ押し込んで、僕は“王女”になった。

扉が勢いよく開く。

「王女はどこだっ！」

「私なら、ここよ」

僕がそう言つと、兵士たちが捕えに来た。

「この、無礼者っ!!」

そう叫ぶのが精一杯だった…。

私がタンスから出ると、静かになっていた。

捕えに来た兵士たちも、私の身代わりになってくれたレンもいなくなっていた。

城の外に出てみると、処刑台があった…。

「何よ……これ……」

処刑台にはレンの姿があつた。レンは私の代わりに殺される……!?

「わ……私はここにいるわ!彼は王女じゃないの!!」

そんな叫び声など聞こえているはずもないのに、私はただ泣き叫ぶだけ。

どうしよう、このままじゃレンが殺されちゃう!

ゴーン……

あ、この音は……

「教会の鐘の音……」

周りが静かになる。処刑の時間が来た。

「だめ……」

もう、誰にも止めることなどできない。そして、彼女”は最後に一言、こう言った。

「あら、おやつの時間だわ」

それは私の口癖だった。

レンは死んだ。私の、せいで

「い……嫌ああああっ!!」

私は叫んだ。ただただ泣き叫んだ。

「ごめんなさい、レン……っ!私わがままなんて言わなければ……

……っ」

私は何度も謝った。レンはもういない。

何度謝ったって、誰にも届くはずなのに……。

『泣かないで、リン』

声が聞こえた。

「レン……？」

振り返っても誰もいない。でも私はその声に応えた。

「うん、もう……泣かないよ、レン……」

私は一人この街を眺めていた。

“王女”が処刑された日から数日が経った。

私は今、港にいた。

私の大好きだった弟のレンはもういない……。レンは私の代わりに

“王女”となって処刑された……。

全部私のせいだ。私が緑の国を消して、なんて言わなければこんなことには……っ！

「うう……レン……」

私はただ泣くことしかできない。けれど、泣いたってもう君は側にいてはくれない……。

「あ……そうだ……っ」

私は前にレンから教えてもらったことを思い出した。それは、

『この小瓶に願いを書いた紙を入れて、街外れの港に流せば』

「願いが叶う……」

急いで瓶と紙を用意し、願いを書いて瓶の中へ入れた。

「私のこの想いが君の元へと届きますように……」

私の願い、いつか君へと届いたなら、私は嬉しいなあ……。

・もしも生まれ変わったのなら、その時はまた遊ぼうね、レン・

〈 F i n 〉

(後書き)

こんな下手な小説を読んでくださってありがとうございます。
これからも頑張っ て行きます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8825o/>

悪ノ娘ト召使

2010年11月13日10時43分発行